

超早期母子分離による繁殖性向上技術の検討

福島県畜産試験場沼尻支場
平成17年度畜産試験場成績概要

1 部門名 畜産－肉用牛－畜産繁殖、畜産保育・育成
分類コード 07－02－38400000

2 担当者 山本伸治・齋藤美緒

3 要 旨

黒毛和種の繁殖経営では、子牛を4ヵ月齢頃まで母牛と一緒に飼養する自然哺育の形態が一般的であるが、自然哺乳における子牛の頻繁な吸乳刺激が母牛の発情回帰を遅らせる一因となっている。そこで、分娩後3日以内の超早期に母子分離を行うことによる親牛の繁殖性向上への効果について検討した。また人工哺育で育成した雌牛が親牛になったときの哺育能力についても調査した。

(1) 分娩後初回発情までの日数は、超早期母子分離区で26.3日、自然哺育区で36.4日となり、超早期母子分離区で短縮される傾向にあった。

(2) 分娩後初回授精までの日数は、超早期母子分離区で41.1日、自然哺育区で53.8日となり、超早期母子分離区で短縮される傾向にあった。

(3) 授精回数は超早期母子分離区、自然哺育区ともに1.5回となった。

(4) 空胎期間は超早期母子分離区で56.1日、自然哺育区で62.0日となり、超早期母子分離区で短縮される傾向にあった。

(5) 人工哺育育成雌牛の産子と自然哺育育成雌牛の産子の2ヵ月齢DGはそれぞれ0.53、0.55となりほぼ同等の発育となった。

以上のことから、超早期母子分離により、初回発情までの日数、初回授精までの日数および空胎期間を短縮できることが示唆された。また、人工哺育育成雌牛の哺育能力には問題ないことが判明した。

4 その他の資料など

なし